Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

069

幼児の描画過程における模倣の契機

奥　美佐子
（名古屋柳城短期大学）

1 はじめに

幼児の描画過程における「模倣」は、幼児が描画表現を開始し展開するために情報摂取し、摂取した情報を自分の描画に反映したものだと捉えて、模倣の描画表現への効果的な働きについて検討してきた（日本保育学会第55、56 回大会で発表）。その結果、幼児の描画過程で模倣が出現する場合、幼児は描画表現の開始から完成にいたるプロセスのどこかの時点で、模倣する対象を選別して情報を取得し、自己表現を活性化するツールとして模倣を効果的に使用していることがわかった。

10 の事例を通して幼児が何を模倣したかを検討する過程で、幼児が情報を摂取する対象となった描画に共通した特徴が見られた。また、模倣の類型別（前稿参照）考察から、Type1 の事例に模倣の契機に繋がる模倣への動機が存在したと推察できるものがあった。本稿では模倣の効果を認めて肯定的に捉えた上で、個々の模倣のケースに対応して模倣行為の読み取りができるように、前稿で示した 10 事例を分析して模倣が出現する経路における模倣の直接的な契機と、それを誘引する動機について検討したい。

2 模倣の契機

事例 1～10 の分析から模倣は、視覚的、空間的、人的なきっかけで出現するのではないかと考えた。そこで、3 つの観点から事例を検討し、表 1 に示した。

幼児が視覚的情報として摂取したのが、主として描画のパーツとパーツの構成の仕方＝構図であった。

- 大きくて明快なフォルム
- 自分の表現にないおもしろい、興味あるフォルム
- ユニットになるようなパーツが連続したもの

以上が、オリジナルをコピーする側の選択条件であった。わかりにくく複雑なフォルムや構図、テーマに合わないものは、選択しなかった。視覚的要件は 10 事例すべてに該当した。

空間的要件は

- 同グループ内（事例 2, 3, 4, 6：Type1、事例 8, 9：Type2）か、隣接するグループ（事例 1：Type1、事例 8, 9：Type2）
- グループ構成でない場合は、比較的近い場所（事例 7：Type2）
- 意識的に並ぶ（事例 5：Type1、事例 10：Type3）

描画過程における模倣は近接した空間で発生した。

人的要件は

- 日常の人間関係の影響があったのは 10 事例中、事例 5, 8, 10 の 3 例である
- 幼児間で‘絵がうまい’と思われている幼児の模倣はなかった

事例 8 は情報源が友だちであった事例、事例 1 0 は仲良しグループが情報交換を意図的にしたものである。事例 5 は日常の関係がオリジナルとコピーの関係に反映したものであった。

全事例で「視覚的刺激」を描画過程で模倣の契機とした。空間的要件は視覚的刺激を得た場として並存し、模倣の契機は「近くに興味あるフォルムをもつ描画がある」ことで、模倣の対象はそのパーツが美しいか、興味ある色や形を有するか、課題にふさわしい表現形式を備えているかなど、視覚的に見て有用かどうかが重要である。内 2 例については模倣の情報はビジュアルなものであるが、人的な誘因があったと考えられる。

3 模倣の動機

模倣の契機に繋がる動機が見られるケースがあった。これについてタイプ別に検討してみよう。

模倣度が高い Type1 の事例 1, 2, 3, 6 は、描き始めのイメージがもてないことが模倣に繋がった。この場合、保育者の導入に問題がある場合もあり、模倣はイメージ形成ができない状況を打開する策だと考えられる。事例 4 は描き始めたフォルムを相互確認するためで、抱いたイメージに自信がもてないケースであった。事例 5 は日常の人間関係の反映があった。比較的模倣度

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

表1　模倣の要件

事例	Type	視覚的刺激となった情報	位置関係	人的関係
1	1	大きくて明快なフォルム	隣接するグループ	特記事項なし
2	1	大きくて明快なフォルム	同グループ内	特記事項なし
3	1	大きいフォルム	同グループ内 対角線上の2組の模倣	特記事項なし
4	1	描き初めのフォルムを相互に確認	同グループ内	特記事項なし
5	1	オリジナルのフォルム、描き順すべて	2人並ぶ	○4歳児の時は主客逆転していた。日常生活における関係と並行する。
6	1	課題に合ったイメージの描画、インパクトのあるパーツ	同グループ内	特記事項なし
7	2	インパクトのあるパーツ	比較的近い場所	特記事項なし
8	2	インパクトのあるパーツ	同グループ内及び隣接するグループ	特記事項なし
9	2	インパクトのあるパーツ	隣接するグループ及び同グループ内	○事例6のオリジナルとお友だち。そこから摂取し、加工して反映する。
10	3	同じ構図とパーツを共有	4人並ぶ	○なかよし4人組

＊　人的関係：日常の親しい友だち関係がある場合は○
＊　　：オリジナルの幼児の絵が上手いという定評がある場合は●

が低いType2では興味あるフォルムを見つけ、自己の表現にダイレクトに、或いは加工して反映した。Type2は契機も動機も視覚的刺激だと言える。事例8では隣接したグループにいる友人の興味深いパーツを取得した。動機がパーツの魅力か、お友だちであるかは特定しがたいが、加工して独自のパーツに変化させていることから、友人から視覚情報の「跳ぶ魚」をアイデアとして取得し、自分の描画に反映したと考えられる。

Type3はType1と同様に模倣度が高い。事例10は、幼児の仲よし4人組という人間関係が模倣の動機のひとつになったことは明らかである。

幼児の描画過程における模倣の経路(図1)は、「美的経験としての視覚的刺激」「イメージが描けない状況」「人間関係」を模倣の動機とし、視覚的刺激を契機として出現した。模倣度が低いタイプほど契機と動機が視覚情報に一本化していたことがわかった。

1)美的経験としての視覚的刺激→情報摂取→描画に反映

2) イメージが描けない状況→視覚的刺激→情報摂取→
→描画に反映

3) 人間関係→①視覚的刺激→情報摂取→描画に反映
→②視覚的情報を共有→描画に反映

図1　模倣の経路（動機、契機を示す）

4　おわりに

モレンハウアーは「視覚と結びついた造形活動にはすべて、模倣という契機が含まれるということである。ー中略ー幼い子どもの「なぐり描き」においてさえ、その「意味」を解明してみるならば、模倣は作用して」[1]いるという。模倣の契機が視覚に結びついたものであることが確認できる。一方、模倣の経路における動機を軽視してはならない。視覚的な情報摂取は基本的には一過性の行為であるが、継続的な観察が必要なケースもある。3)の①の経路をとった2人の幼児は、4歳児の時にはこの当時と逆転した関係を示し、オリジナルとコピーの関係も逆の位置にあった。事例5の4か月後の描画活動では2人は模倣関係を示さず、別のグループで独自の表現をした。日常の遊びに別の友だちが加わり、人間関係が変化し始めたのと平行する。事例5は2年にわたる2人の女児の関係性を見ていかなければ、結論が出せないものである。

幼児の描画過程における模倣をポジティブに受容し、模倣の経路における動機と契機を端的に読み取り且つ理解して、幼児の表現が創造的に展開するよう対応することが必要であろう。

［引用文献］

1)　クラウス・モレンハウアー著，真壁宏幹他訳，『子どもは美をどう経験するか』，玉川大学出版部，2001，p.38

NII-Electronic Library Service